

青年期における愛着と攻撃性との関連

尾崎 康子・杉本 宜子*

Relations between Attachment and Aggression in Adolescence

Yasuko OZAKI, Noriko SUGIMOTO

キーワード：愛着，攻撃性尺度，怒りの表出尺度，青年期

keywords：attachment, aggression, anger expression, adolescence

問題と目的

乳幼児期に，養育者と子どもとの間の相互交渉を通して愛着が形成されるが，その後，愛着は内在化され，表象レベルの内的作業モデルとして機能するようになる。Bowlbyの愛着理論では，内的作業モデルは，成長の過程でその人の対人関係，情動，行動など広範囲に影響を及ぼし，また一度内在化された内的作業モデルは生涯にわたり変わることがないと言われている。従って，愛着は，乳幼児期のみならず青年期においても連続して機能する重要な課題と言えよう。

乳幼児期の愛着タイプについては，Ainsworthによって開発されたストレンジ・シチュエーション法による安定型，回避型，両価型の3タイプが広く知られている。安定型の子どもは母親を安全基地とし，探索行動を行うかと思えば，時には母親の後を追ったり，母親の方へ戻ったりと，探索と愛着のバランスが上手くとれている。母親との分離時には多少の泣きや混乱を示すが，実験者からの慰めを受け入れることができる。再会時には容易に落ち着きを取り戻し，程なく遊びに没頭する。母親の養育態度は，子どもの愛着のシグナルに敏感で，情緒的応答性も高く，一貫的で予測しやすいため，子どもは母親の働きかけに対して信頼感を寄せることができる。自分が困っている時には母親は必ずそばに来て自分を助けてくれると確信しているので，子どもの愛着行動は全般的に安定すると考えられている。

回避型の子どもは母親との分離時にもさほどの混乱を示さない。また再会時では母親を避けるような行動を示す傾向がある。母親との身体接触には接近一忌避の葛藤が見られ，母親に近づいて行ったかと思うと急に中止したり，抱き上げられても嬉しそうな様子はないが，おろされると嫌がるといった行動が

目立つ。母親の養育態度は拒否的な場合が多く，身体接触や微笑が少ない。子どもの行動を一方向的に強く統制しようとする傾向がある。そのため，子どもは愛着シグナルを母親に向けても応答を得られないことが多く，愛着行動を示すことで母親が離れていってしまうのであれば，何もしないで母親に近くにいてもらおうとする。

両価型の子どもは母親との分離時に強い混乱と不安を示す。再会時には親に強い身体接触を求めるが，その一方で親に対して怒りを示し，激しくたたいたりする。行動は不安定で用心深い態度が随所に見られ，執拗に親にくっついていようとする。母親が子どもを一人で遊ばせようとする抵抗や怒りを示す。また，両価型の子どもは他の愛着タイプと比べて，苛立ちやすい気質傾向にあると言われている。母親の養育行動は子どもの愛着シグナルにあまり敏感ではなく，その時の母親の気分や都合による応答が多い。従って一貫した応答は得られず，子どもは母親の反応を予測しにくい。そのため，母親が離れていくと戻ってくるという確信がなく，またいつ自分から離れていくかわからないため，様々な愛着シグナルを送ることで，母親を自分につないでおこうとする。

また，青年期の愛着についても，様々な測定法が開発され，青年期の愛着タイプが乳幼児期と対応していることが示されている。成人愛着面接法は，Main & Goldwyn (1984)が開発した半構造化された面接手法であり，過去の自分と養育者との関係について尋ねることによって，内的作業モデルの質を反映した記憶表象を明らかにしていくものである。この成人愛着面接法では，愛着タイプを自律型，軽視型，とらわれ型に振り分けるが，これらは，順に乳幼児期のストレンジ・シチュエーション法の安定

*富山大学教育学部生涯教育課程平成18年度卒業

型、回避型、両価型に理論的に対応することが示されている。また、我が国では、Hazan & Shaver (1987)の強制選択法の愛着スタイル尺度を多項目尺度に作り変えた成人版愛着スタイル尺度(詫摩・戸田, 1988)が青年期の愛着を測定する際に使われている。ここでは、愛着スタイル傾向として、安定性、回避性、両価性が示されている。安定性は、たやすく人と親しくなれるし、相手に気楽に頼ったり頼られたりすることが出来る愛着スタイルであり、安心してお互いに何でも打ち明けることが出来るといった「対人スキルの上手さと関係性に対する信頼感」から構成されている。回避性は、あまり気軽に人と親しくなれず、全面的には人を信用できない愛着スタイルであり、人に親しくされると嫌になってしまうし、自分が望む以上のものを求められるとイライラしてしまうというような「人嫌いと自尊心の強さ」から構成されている。両価性は、人はいやいや自分と接してくれているのではないか、自分はいつも相手と一緒にいたい、相手は疎ましく思っているのではないか、相手は自分のことを本当は好きでないのではないかといった「過度の親和性と関係性への不安感」から構成されている。

ところで、幼児期においては、愛着と攻撃行動との関連が多く先行研究によって指摘されている。Sroufe & Waters (1977)は、愛着の内的作業モデルは、ストレスフルな状況における個人の情動制御のルールを提供していると述べている。愛着対象が子どものストレスのサインに的確に応答するならば、その子どもは愛着対象から支持と安心感を積極的に求めるルールを知ることになり、ストレス状況下においても子どもは安定した情動制御のスタイルを獲得していく。それに対して、愛着が不安定で愛着対象から支持と安心感が得られない場合は、子どもの情動制御は不安定になり、攻撃行動も増えることが推測される。実際、子どもの愛着と攻撃行動の関係を調べた研究では(桂田, 2005; 尾崎, 2006)、両者の間に高い相関が認められ、また、親子の情動的关系と攻撃行動を調べた研究でも(廣田, 2004)、親子の情動的关系が悪いほど子どもの攻撃行動が高いことが報告されている。

一方、青年期における愛着と攻撃行動との関連を調べた研究に、怒りを含めた4種の情動の制御と愛着との関連を調べた坂上・菅沼(2001)の研究がある。そこでは、愛着スタイルの回避性と両価性の高

い人は安定性の高い人に比べて、喜び、悲しみ、怒り、恐れ的情動の覚知に違いがあることが報告されている。安定性の高い人は、快情動の経験が多く、情動表出の解釈が正確であった。安定した愛着傾向を持っている人ほど、情動に対して比較的自由に意識を向けることができ、中でも他者との絆を深める役割を持ち、悲しみや喜びといった情動を他者や自分を理解する手がかりとして相対的によく用いている可能性がある。それに比べて、回避性の高い人は、安定性とは逆であった。悲しみに対する不快感は高く、喜びに対する内省や覚知は低かった。対人関係において回避的な傾向が強い人ほど、他者との関わりを深めることに繋がりやすい悲しみや喜びといった情動に対して否定的な構えを持っていた。一方で、回避性の高さや情動に対する内省の低さや自己覚知の低さとの間には関連は見られなかったため、意識下での情動情報の処理において抑圧的であるが、本人にはあまり抑圧しているという自覚がないのではないかと推測された。両価性の高い人は怒りや恐れを多く経験し、怒りの解釈が不正確であった。しかし、怒りに対する内省傾向や他者の怒りの覚知が相対的に低いことから、両価的な傾向が強い人は、怒りを意識化できないのではなく、怒りに関する情動情報の深い処理が苦手であることが推測された。従って、回避性、両価性という不安定な愛着は情動の覚知や処理に困難をもつことが示唆された。

幼児期における愛着と攻撃性との関係については、先行研究で実証されてきたが、愛着の内的作業モデルが生涯にわたって連続性と一貫性をもって作用することを考慮すると、青年期においても愛着と攻撃性との関係が認められることが想定される。また、一口に攻撃性といっても、攻撃性は、いくつかの構成概念から成る複合的な特性として捉えられ、攻撃性が多次元の尺度に分類されている(安藤・曾我・山崎他, 1999)。青年期における情動の一分類としての怒りについては、愛着との関係が示されたが(坂上・菅沼, 2001)、怒りの表現としての攻撃性について、多次元尺度から愛着との関係の検討が求められる。また、工藤(2006)は青年期における愛着タイプの「おそれ型」に着目し、他者への不信感と自尊心の低さからなる内的作業モデルを持ち、愛情の撤去を恐れて抗議や主張性を持つことが困難になるために、攻撃性を抑圧するが、他者との関係が危機的になり、自己の防衛が破綻の脅威にさらされる

と、逆に制御不能な激しい攻撃性を表出することになりかねないことを報告している。従って、愛着タイプによっては、攻撃性の表出だけではなく、攻撃性の抑圧の状況によって、攻撃性の特性が明らかになることが推測される。

そこで、本研究では、青年期の愛着を質問紙法によって調べるとともに、攻撃性を多次元尺度と表出抑制の表現形式の観点から計測し、青年期の攻撃性のどのような特性が愛着と関連しているのかを検討することを目的とする。

方 法

1. 対象者

T 大学に在籍する大学生362名。分析には、欠損値の多い者を除いた345名（男性207名、女性138名）のデータを用いた。平均年齢は19.5歳、年齢幅は18～25歳であった。有効回答率は95%であった。

2. 手続き

2006年12月に、大学の講義開始前に一斉に質問紙を配布し、その場で回収した。所要時間は約15分であった。なお、調査は無記名で行った。

3. 調査内容

愛着の測定 詫摩・戸田(1988)の成人版愛着スタイル尺度を用いた。これは、3つの下位尺度である安定性、回避性、両価性から構成されており、各下位尺度6項目の計18項目から成る。これを、「全く当てはまらない」「ほとんど当てはまらない」「あまり当てはまらない」「少し当てはまる」「やや当てはまる」「非常に良く当てはまる」の6件法で評定を求めた。

攻撃性の測定 攻撃性尺度として、多次元の攻撃性を測定する日本版 Buss-Perry 攻撃性質問紙(安藤他, 1999)の4下位尺度から、「短気」の5項目、「敵意」の6項目、「身体的攻撃」の6項目、「言語的攻撃」の5項目の計22項目を用いた。

また、怒り表出尺度として、STAXI 日本語版(鈴木・春木, 1994)の「怒りの表出」の4項目、「怒りの抑制」の4項目の計8項目を用いた。「怒りの表出」の4項目は、「人に皮肉なことを言う」「誰かにいらいらさせられると、その人に自分の気持ちを伝える」「すねたり、ふくれたりする」「自分を怒らせるものは何でもやっつけようとする」であり、自分の怒りを直接表出する状態を表している。「怒りの抑制」の4項目は、「外から見ると、

実は自分はもっと怒っている」「怒りを抑える」「心の中は煮えくり返っていても、それを外には表さない」「誰にも言えないような恨みを抱くようになる」であり、怒りの感情は起こっているが、それを直接表現しないで心の中に抑圧している状態を表している。

これら30項目について、「全く当てはまらない」「あまり当てはまらない」「どちらともいえない」「だいたい当てはまる」「非常に良く当てはまる」の5件法で評定を求めた。

結果と考察

1. 尺度の因子構造

愛着スタイル尺度 愛着スタイル尺度18項目について項目分析を行ったが、何れの項目において天井効果もフロアー効果も見られなかった。そこで、18項目の評定値を各項目の得点として用い、最尤法、バリマックス回転による因子分析を行ったところ、因子負荷量が.197と大変低く、かつ他の因子負荷量との差が甚少である項目が見られたため、その項目を除いて、再度17項目で因子分析を行った。その結果、詫摩・戸田(1988)の報告と同じ3因子「安定性尺度」「両価性尺度」「回避性尺度」が抽出された(Table 1)。内的整合性は、「安定性尺度」が $\alpha = .84$ 、「両価性尺度」が $\alpha = .80$ 、「回避性尺度」が $\alpha = .68$ であり、信頼性がおおむね保証された。

攻撃性の2つの尺度 Buss-Perry 攻撃性質問紙22項目について項目分析を行ったが、天井効果もフロアー効果も見られなかった。そこで、Buss-Perry 攻撃性質問紙の22項目について、最尤法、プロマックス回転による因子分析を行ったところ、因子負荷量が|.40|以下の項目が見られたため、その3項目を除いて、再度因子分析を行った。その結果、安藤他(1999)と同じ攻撃性尺度の4因子「短気」「身体攻撃」「敵意」「言語攻撃」が抽出された(Table 2)。各下位尺度の内的整合性は「短気」が $\alpha = .76$ 、「身体的攻撃」が $\alpha = .77$ 、「敵意」が $\alpha = .75$ 、「言語的攻撃」が $\alpha = .67$ であり、概ね信頼性が保証された。

また、STAXI 日本語版(鈴木・春木, 1994)の怒り表出尺度については、STAXI 日本語版の採点法に沿って、下位尺度の「怒りの表出」と「怒りの抑制」のそれぞれ4項目の加算値を得点として用いた。内的整合性は、「怒りの表出」が $\alpha = .48$ 、

Table 1 愛着スタイル尺度の因子分析 (最尤法, バリマックス回転)

	因子			共通性	
	I	II	III		
第I因子 安定性尺度					
01 私はすぐに人と親しくなるほうだ	.834	.052	-.075	.703	
07 私は知り合いがしやすいほうだ	.763	-.049	-.013	.585	
18 初めて会った人とでも上手くやっていると自信がある	.733	-.064	-.007	.541	
04 私は人に好かれやすい性質だと思う	.696	-.168	-.052	.516	
11 気軽に頼ったり頼られたりすることができる	.519	-.094	-.243	.337	
15 たいいていの人は私の事を好いていてくれていると思う	.510	-.254	.024	.326	
第II因子 両価性尺度					
12 時々友達が本当は自分を好いてくれているのではないかと思うことがある	-.103	.765	.202	.637	
05 人はいやいや私と接しているのではないかと思うことがある	-.116	.699	.179	.534	
03 ちょっとしたことですぐ自信をなくしてしまう	-.031	.691	.008	.478	
13 あまり自分に自信が持てない方だ	-.162	.672	-.046	.480	
17 自分を信用できないことがよくある	-.118	.588	.157	.384	
09 私はいつも人と一緒に居たがるので、時々人から疎まれてしまう	.001	.332	-.052	.113	
第III因子 回避性尺度					
06 あまり親しくされたり、こちらが望む以上に親しくされるとイライラしてしまう	.004	.151	.691	.500	
08 どんなに親しい間柄であろうと、あまりなれなれしい態度をとられると嫌になってしまう	-.030	.089	.598	.367	
16 あまり人と親しくするのは好きではない	-.329	-.037	.552	.415	
10 人は全面的には信用できないと思う	-.119	.148	.448	.237	
14 私は頼らなくとも自分ひとりで十分に上手くやっていると十分にかれると思う	.066	-.102	.419	.190	
	因子寄与率(%)	25.37	15.23	12.157	
	累積寄与率(%)	25.37	40.60	52.75	

Table 2 Buss-Perry 攻撃性尺度の因子分析 (最尤法, プロマックス回転)

	因子				共通性	
	I	II	III	IV		
第I因子 短気						
17 ばかにされると、すぐ頭に血がのぼる	.810	.025	-.094	-.014	.666	
07 たいした理由もなくかっとなることがある	.666	-.019	.053	-.183	.480	
10 かっとなることを抑えるのが難しいときがある	.612	.014	.111	.083	.393	
15 いらいらしていると、すぐ顔に出る	.524	-.133	.080	.129	.315	
01 ちょっとした言い合いでも、声が大きくなる	.466	-.119	.022	.237	.288	
第II因子 身体的攻撃						
20 殴られたら、殴り返すと思う	-.119	.792	.020	.119	.656	
18 挑発されたら、相手を殴りたくなるかもしれない	.325	.561	-.090	-.027	.429	
03 人を殴りたいという気持ちになることがある	.225	.556	.139	-.131	.396	
05 相手が先に手を出したとしても、やり返さない	.081	-.541	.011	-.017	.230	
09 権利を守るためには暴力もやむを得ないと思う	.055	.516	.004	.054	.272	
13 どんな場合でも、暴力に正当な理由があるとは思えない	.197	-.509	-.027	-.030	.299	
第III因子 敵意						
22 陰で人から笑われているように思うことがある	.007	-.103	.768	.072	.606	
11 友人の中には私のことを陰であれこれ言っている人がいるかもしれない	.124	-.017	.716	-.088	.536	
14 私を嫌っている人は結構いると思う	.039	.075	.606	.005	.374	
06 私を苦しめようと思っている人はいない	.052	-.122	-.473	-.006	.241	
第IV因子 言語的攻撃						
21 友達の意見に賛成できないときには、はっきり言う	-.199	.058	.148	.739	.611	
04 自分の権利は遠慮しないで主張する	.038	.135	-.073	.604	.390	
16 誰かに不愉快なことをされたら、不愉快だとはっきり言う	.265	-.023	-.197	.467	.328	
08 意見が対立したときは、議論しないと気がすまない	.305	-.065	.070	.401	.263	
	因子寄与率(%)	25.39	11.22	10.17	7.12	
	累積寄与率(%)	25.39	36.61	46.78	53.90	
	I	-				
因子間相関	II	.47	-			
	III	.43	.22	-		
	IV	.33	0.2	0.6	-	

「怒りの抑制」 $\alpha = .51$ であった。

これら攻撃性尺度の4下位尺度と怒りの表出尺度の2下位尺度との Pearson 積率相関係数を求めたところ (Table 3), 「怒りの表出」は何れの下位尺度との間にも正の相関が、また「怒りの抑制」は「敵意」と正の相関が認められた。このことから攻撃性尺度の「短気」「身体的攻撃」「言語的攻撃」は、怒りの表出を表していると考えられるが、「敵意」は、怒りの表出だけでなく抑制とも関係していることが示された。

2. 愛着スタイル尺度と攻撃性との関連

愛着スタイル尺度の得点を各愛着スタイル傾向の強さとみなし、攻撃性の尺度との関係を見るために、両尺度間の Pearson 積率相関係数を求めた (Table 4)。「安定性尺度」は、「敵意」と負の相関が、「言語的攻撃」とは正の相関が認められた。「両価性尺度」は、「短気」及び「敵意」と正の相関が認められた。「回避性尺度」は、「身体的攻撃」「敵意」と正の相関が認められた。このように、攻撃性の特性ごとに愛着スタイルとの関係を調べると、愛着スタイルによって関係する攻撃特性が異なることが示さ

れた。愛着の安定性は、基本的には攻撃性と正の関係を示さないが、言語的攻撃だけは正の相関が示された。一方、両価性と回避性は、基本的には攻撃性と関係しているが、言語的攻撃だけは、関係が認められなかった。

また、怒りの表出尺度について、愛着スタイルとの関係を見ると、「安定性尺度」は、表出と抑制のどちらとも関係しないが、「両価性尺度」では、「怒りの表出」と関係相関が示された。逆に、「回避性尺度」では、「怒りの抑制」と相関関係があった。愛着スタイルによって、怒りを直接に表出するものと直接に表出せずに抑圧するものがあることが分かる。

3. 攻撃性を規定する愛着スタイル尺度

愛着スタイルが攻撃性の特性にどのように影響しているかを検討するために、攻撃性の各下位尺度を従属変数とし、愛着スタイルの3尺度を独立変数として、ステップワイズ法の重回帰分析を行った (Table 5)。

まず、攻撃性尺度について、「短気」では、「両価性尺度」から最も強い有意な正の影響がみられ、

Table 3 攻撃性尺度と怒り表出尺度との相関係数

		攻撃性尺度			
		短気	身体的攻撃	敵意	言語的攻撃
怒り表出尺度	怒り表出	.474***	.396***	.269***	.396***
	怒り抑制	-.153**	.070	.232***	-.127*

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

Table 4 愛着スタイル尺度と攻撃性尺度・怒り表出尺度との相関係数

	攻撃性尺度				怒りの表出尺度	
	短気	身体的攻撃	敵意	言語的攻撃	怒りの表出	怒りの抑制
安定性尺度	.035	-.117*	-.296***	.226***	-.020	-.084
両価性尺度	.378***	.022	.569***	-.066	.214***	.127*
回避性尺度	.184**	.228***	.279***	.065	.184**	.270***

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

Table 5 愛着スタイル尺度と攻撃性尺度・怒りの表出尺度の重回帰分析(ステップワイズ法)

	攻撃性尺度				怒りの表出尺度	
	短気	身体的攻撃	敵意	言語的攻撃	怒りの表出	怒りの抑制
安定性尺度	.148**		-.152**	.246***		
両価性尺度	.386***		.506***		.187***	
回避性尺度	.143**	.228***	.161***	.111*	.151**	.270***
R ² 乗	.177***	.052***	.377***	.063***	.068***	.073***

数値は、標準偏回帰係数

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

「安定性尺度」と「回避性尺度」からも有意な正の影響があった。「敵意」でも、「両価性尺度」から最も強い有意な正の影響がみられたが、「回避性尺度」からも有意な正の影響に対して、「安定性尺度」は有意な負の影響であった。「身体的攻撃」では、「回避性尺度」から有意な正の影響が、また、「言語的攻撃」では「安定性尺度」から有意な正の影響がみられた。これらの結果から、短気や敵意という攻撃特性には、愛着の両価性が強い影響を及ぼしていることが示された。また、身体的攻撃には、愛着の回避性が、そして、言語性攻撃には愛着の安定性が強い影響を及ぼしていることが示され、青年が有する攻撃特性によって、影響を与える愛着スタイルが異なることが分かった。

一方、怒りの表出尺度について、「怒りの表出」では、「両価性尺度」から最も強い有意な正の影響がみられ、「回避性尺度」から有意な正の影響があった。「怒りの抑制」では、「回避性尺度」のみから正の有意な影響がみられた。従って、青年の怒りの表出には、愛着の両価性が最も影響を及ぼしているのに対して、怒りの抑制には、愛着の回避性が影響を及ぼしていることが示された。愛着の両価性と回避性は、ともに愛着不安定のタイプであるが、それぞれが影響を及ぼす怒りの表現形式があり、表出と抑制という正反対の表現形式を規定していることが示唆された。

4. 愛着群の分類

次に、愛着スタイル尺度の得点に基づいて対象者を安定群、回避群、両価群の3つの愛着群に分類し、愛着群における攻撃性の特性を検討する。愛着群の分類に際しては、愛着スタイル尺度である「安定性尺度」「回避性尺度」「両価性尺度」の3つの下位尺度の中で、その個人が最も高い得点を得た下位尺度に相当する愛着スタイルをその個人の優勢な愛着スタイルとみなすこととした。すなわち、「安定性尺度」得点が「回避性尺度」と「両価性尺度」の得点よりも高い回答者は安定群とし、両価群と回

避群についても同様の手続きで愛着群を同定した。その結果、安定群は132名(男70名、女62名)、両価群は155名(男91名、女64名)、回避群は43名(男34名、女9名)、であった。なお、複数の下位尺度で同得点を示した15名については特定の愛着群を同定できないため、対象から除いた。これらの3つ愛着群の割合は、坂上・菅沼(2001)の研究と概ね同じ割合であった。

これら安定群、両価群、回避群の3つの愛着群と「安定性尺度」「両価性尺度」「回避性尺度」の3つの愛着スタイル尺度得点との関係を検討するために、愛着スタイル尺度得点を従属変数とし、愛着群を独立変数とした1要因3水準の分散分析を行った(Table 6)。その結果、「安定性尺度」「両価性尺度」「回避性尺度」の何れについても、愛着群の効果が0.1%水準で有意であった。さらにLSD法により多重比較を行った結果、「安定性尺度」については、安定群が両価群と回避群よりも有意に高かった($p<.05$)。また、「両価性尺度」については、両価群>回避群>安定群の有意な関係が($p<.05$)、「回避性尺度」については、回避群>両価群>安定群の有意な関係が見られた($p<.05$)。

この結果から、安定群は「安定性尺度」得点が最も高く、同様に、両価群は「両価性尺度」得点が、回避群は「回避性尺度」得点が最も高いことが示され、3つの愛着群が愛着スタイル尺度を反映している分類であったことが示された。

5. 愛着群における攻撃性の特徴

愛着群における攻撃性尺度の特徴を検討するために、攻撃性の下位尺度を従属変数とし、愛着群を独立変数とする1要因3水準の分散分析を行った(Table 7)。その結果、「短気」「敵意」「身体的攻撃」「言語的攻撃」の何れの下位尺度についても群の効果は有意であった。そこで、LSD法を用いた多重比較を行ったところ、「短気」では、両価群が安定群と回避群よりも有意に高く、「身体的攻撃」では、回避群が安定群と両価群よりも有意に高く

Table 6 愛着群別の愛着スタイル尺度平均値(標準偏差)と分散分析結果

	安定群 M (SD)	両価群 M (SD)	回避群 M (SD)	F値 F (2,327)	多重比較の結果 (LSD法)
安定性尺度	4.04 (.57)	3.00 (.70)	2.85 (.70)	107.9***	安定群>両価群, 回避群
両価性尺度	3.02 (.72)	4.24 (.61)	3.28 (.68)	127.8***	両価群>回避群>安定群
回避性尺度	2.51 (.74)	2.82 (.75)	4.03 (.53)	72.0***	回避群>両価群>安定群

*** $p<.001$

Table 7 愛着群別の攻撃性尺度・怒り表出尺度の平均値（標準偏差）と分散分析結果

		安定群 M (SD)	両価群 M (SD)	回避群 M (SD)	F値 F (2,327)	多重比較の結果 (LSD法)
攻撃性尺度	短気	2.68 (.81)	3.03 (.79)	2.71 (.73)	7.87***	両価群>安定群、回避群
	身体的攻撃	2.70 (.81)	2.81 (.77)	3.18 (.74)	6.07**	回避群>安定群、両価群
	敵意	2.83 (.67)	3.44 (.62)	3.16 (.78)	30.74***	両価群>回避群>安定群
	言語的攻撃	2.93 (.74)	2.70 (.71)	2.83 (.65)	3.61*	安定群>両価群
怒りの表出尺度	怒りの表出	2.57 (.60)	2.76 (.62)	2.69 (.63)	3.38*	両価群>安定群
	怒りの抑制	3.01 (.64)	3.18 (.64)	3.38 (.68)	4.15*	回避群>安定群

*p<.05, **p<.01, ***p<.001

(p<.05),「言語的攻撃」では、安定群が両価群よりも有意に高く(p<.05),「敵意」では、両価群>回避群>安定群という有意な関係が見られた(p<.05)。

怒りの表出尺度を従属変数とした1要因3水準の分散分析でも、「怒りの表出」と「怒りの抑制」について群の効果は有意であった。LDS法による多重比較を行ったところ、「怒りの表出」では、両価群が安定群よりも有意に高く(p<.05),「怒りの抑制」では、回避群が安定群よりも有意に高かった(p<.05)。

回答者を愛着群に分けて攻撃性尺度の特性を調べたが、愛着が不安定である両価群と回避群では、愛着が安定している安定群よりも攻撃性が高い傾向にあった。しかし、両価群と回避群では、優勢な攻撃特性が異なっており、両価群は「短気」と「敵意」の攻撃性が高く、回避群では「身体的攻撃」が高かった。また、安定群では、「短気」「敵意」「身体攻撃」の攻撃性は最も低いが、「言語性攻撃」については、攻撃性が高いことが特徴的であった。また、怒りの表出と抑制という側面から、愛着群の特徴をみると、両価群は「怒りの表出」が高く、回避群は「怒りの抑制」が高いという両群の怒りの表現形式の違いが明らかになった。前項では、個人内の「安定性尺度」「回避性尺度」「両価性尺度」の3つの愛着スタイル傾向の強さを測定して、攻撃性との関係を調べた。それに対して、本項では、個人を特定の愛着スタイルに強制分類し、3つの愛着群を同定して、愛着群における攻撃性の特性を調べたところ、愛着スタイル傾向の強さと攻撃性との関係について同様の結果が得られた。このことから、愛着群の同定の有効性が示されたとともに、個人の愛着型における攻撃性の特性が明確にされた。

総合的考察

乳児期において、愛着安定型の子どもは安全基地である養育者への接近や接触を求め、それに対して養育者が情動への的確な応答をすることによって、情動制御が行われていく。幼児期以降においては、その情動制御の経験が愛着の内的作業モデルとして内在化されるので、ストレスフルな状況に際しても安定した情動制御行動をとることができる。これに対して、愛着不安定の回避型の子どもは、ストレスフルな状況において、自己の感情を切り離し、支持や慰みを求めるための愛着行動を全て抑制し、愛着欲求が活性化される状況を回避するため、適切な情動制御は習得されない。また、両価型の子どもは、不安や怒りを直接養育者に向けるが、それらの情動が養育者によって適切に制御されないために、情動制御が困難なままになっていると捉えることができよう。この観点から、子どもの攻撃性を考えてみると、攻撃という負の情動が起こった際に、愛着安定型の子どもは、攻撃性を適切に制御することができるが、愛着不安定の回避型の子どもは、攻撃性の起こる状況自体を回避したり、攻撃性の情動を表出せず心の中に抑圧することが考えられる。また、同じ愛着不安定であっても両価型の子どもは、情動を最大限に表出することから、攻撃性も抑制せずに明白な表出をしていくことが考えられる。実際に、幼稚園での行動観察を行った Sroufe (1983) は、安定型の子どもは、衝動性や感情の統制に柔軟性や融通性があるが、回避型の子どもは、友達に対して敵意的であり、両価型の子どもは、衝動性や緊張感が強いことを報告している。

愛着の内的作業モデルが生涯にわたって連続性と一貫性をもって作用することを考慮すると、幼児期の愛着と攻撃性の関係性が青年期においても同様に

言及できることが考えられるが、本研究において、青年期の愛着と攻撃行動との関連を調べたところ、幼児期における愛着タイプの特徴が青年期においても認められることが示された。以下、本研究で示された青年期の愛着と攻撃性の関係を愛着群別に見ていく。

愛着の安定群は、怒りを表出したり、抑圧することが他の群よりも低かった。愛着安定の子どもは、養育者との相互交渉から良好な対人関係の内的作業モデルをもっており、それに基づいて社会的にも対人行動をとるので、社会的コンピテンスが高いことが指摘されている。社会的コンピテンスが高ければ、対人場面でストレスや葛藤が起こることは低く、そのため、怒りなども生起する確率は低いことが予想される。従って、青年期の愛着群についても怒り自体の生起が低いことが、幼児期からの連続性の観点から推測されることである。また、攻撃性の特性をみても、安定群では短気、身体的攻撃、敵意の攻撃性が低かった。坂上・菅沼(2001)の研究でも、安定性の高い人は怒りの主観的経験頻度が他群より有意に低く、怒りの内省傾向と他者覚知は有意に高かった。従って、安定性の高い人は攻撃行動を誘発するような怒りの感情をあまり持たず、また、自分の中で上手く処理できるため、攻撃行動が他群に比べて低くなると考えられる。しかし、本研究の安定群では、言語的攻撃が高いことが特徴的であった。パーソナリティ研究において、情緒安定性が高いと問題攻撃性が高いことが指摘されている(曾我・島井・大竹, 2002)。愛着が安定していると、自己有能感と対人関係の自信から、嫌なことは嫌とはっきり言うことができ、自分が正しいと思ったら主張できるといった行動が、言語的攻撃の高さに影響を与えていることが考えられる。

両価群は、愛着不安定に属する群であるが、怒りを表出することが高く、怒りの抑制が低いことが特徴的であった。幼児期の両価型は、母親との分離再会時において親に強い身体接触を求める一方で、親に対して激しい抵抗や怒りを示す子どもである。怒りを抑圧せずに最大限に表出するところに両価型の特徴があったが、青年期の両価群も同様の傾向が示されたことになる。また、両価群では、短気と敵意の攻撃特性が他の群よりも高かった。両価型の母親の態度は、その場の気分や都合で応答することが多く、子どもは一貫した応答が得られないため、苛立

ちやすい傾向にある。また、成長しても、母親の表象は「うるさい」「押し付けがましい」といった干渉的なものと「一貫してない」「矛盾した」といった不安定的なものが共存しており、恋人に対しても、楽しさと同じくらい苦しさを感じるといった両価的情動を持つ傾向にあると言われている(詫摩・戸田, 1988)。青年期においても両価群の人は、対人関係において親和性を求めている一方で、相手がそれに応じてくれなかったり、自分を拒否するような反応が見られた際に、「裏切られた」「自分のことを嫌いなのだ」などと感じ、強い不満や敵意を抱き、攻撃行動に繋がるのではないかと考えられる。

回避群もまた両価群と同様に、愛着不安定に属する群であるが、両価群の人が怒りの感情を抱くと表面上に現れやすいのに対して、回避群の人は怒りの感情を抑圧することに特徴があった。しかし、攻撃特性をみると身体的攻撃が高いことから、攻撃を表出する場合には、身体的な表現になることが示された。また、敵意も安定群より高かったが、敵意は怒りの表出と抑制の両方に関係しており、回避群の人は攻撃を抑圧するばかりでなく、何かの契機にはその抑圧された攻撃性を表出する傾向が窺われる。回避型の母親は拒否的な応答が多いため、子どもは母親に対しては一定の距離を保つことで母親との愛着を築くと考えられている。青年期においても、他者に対して気軽には仲良くなれないし、自分が望む以上のことを求められると不快に思う、また、恋人に対しても少し冷めた体験を報告することが多いと言われている(詫摩・戸田, 1988)。怒りの感情を抱いても、それを抑圧する傾向があり、その抑圧された感情は累積していき、何かの契機に、怒りを抑制しきれずに身体的攻撃という激しい攻撃行動となって表出されることが推察される。坂上・菅沼(2001)は、回避性の高い人は喜びと悲しみに対する不快感が安定性よりも高く、喜びに関しては、自己覚知と内省傾向が低いことを報告している。回避性の高い人は、幼児期より情動を抑圧してきた結果、情動覚知が低くなって、自己による情動制御が適切に行うことができないことが考えられる。このような情動制御の状態では、自分の攻撃性をなかったことのように切り捨てて抑圧してしまうか、それとも抑圧できずに激しい攻撃行動を起こしてしまうかといった不安定な行動をとることになると言えよう。これは、愛情の撤去を恐れて攻撃性を抑圧するが、他者との

関係が危機的になり、自己の防衛が破綻の脅威にさらされると、逆に制御不能な激しい攻撃性を表出すると言われている愛着の「おそれ型」(工藤, 2006)と共通したメカニズムであると考えられる。

本研究では、青年期において愛着の状況が攻撃行動に影響を与えていることが示された。幼児期には愛着タイプと攻撃行動は一定の関連が認められているが、青年期においても影響が見られるということは、愛着の状態が成長しても連続して対人関係や情動を規定していることが窺がえた。しかし、本研究で用いた愛着スタイル尺度は、個人がもつ対人関係の枠組みである自己と他者の在り方に関する表象を測定しているものであり、ここで測定された愛着の状態が幼児期の愛着タイプとどのように対応しているかについては、さらなる検討が必要である。

謝 辞

本研究を実施するにあたり、調査実施に快く承諾していただいた大学の先生方、また調査に協力していただいた大学生の皆様から感謝を申し上げます。

文 献

- 安藤明人・曾我祥子・山崎勝之・島井哲志・嶋田洋徳・宇津木成介・大芦治・坂井明子 1999 日本版 Buss-Perry 攻撃性質問紙 (BAQ) の作成と妥当性、信頼性の検討 心理学研究, **70**, 384-392.
- Hazan, C. & Shaver, P. R. 1987 Romantic love conceptualized as an attachment process. *Journal of Personality and Social Psychology*, **52**, 511-524.
- 廣田希代子 2004 親子の情緒的関係と子どもの攻撃性及び抑うつ傾向との関連—児童期の子どもを対象として 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 心理発達科学, **51**, 319-321.
- J.ボウルビィ 黒田実郎他訳 1991 愛着行動 岩崎学術出版社 (Bowlby, J. 1973 *Attachment and loss*. Vol. 2: Separation. Anxiety and anger. New York: BasicBooks)
- 桂田恵美子 2005 幼児の攻撃行動と愛着・母親の養育行動との関連 関西学院大学人文論究, **55**(2), 75-93.
- 工藤晋平 2006 おそれ型の愛着スタイルにおけ

る攻撃性の抑圧—P-Fスタディを用いた検討 日本パーソナリティ研究, **14**, 161-170.

- Main, M. & Goldwyn, R. 1984 *Adult attachment scoring and classification system*. Unpublished manuscript, University of California, Berkeley.
- 尾崎康子 2006 幼児の社会情動的行動に及ぼす愛着の影響 日本教育心理学会第48回総会論文集, 6.
- 坂上裕子・菅沼真樹 2001 愛着と情動制御—対人様式としての愛着と個別情動に対する意識的態度との関連 教育心理学研究 **49**, 156-166.
- 曾我祥子・島井哲志・大竹恵子 2002 児童の攻撃性と性格特性との関係の分析 心理学研究, **73**, 358-365.
- Sroufe, L. A 1983 Infant-caregiver attachment and patterns of adaptation in preschool: The roots of maladaptation and competence. In M. Perlmutter (Ed.), *The Minnesota symposium on child psychology*. Hillsdale, NJ: Erlbaum.
- Sroufe, L. A. & Waters, E. 1977 Attachment as an organizational construct. *Child Development*, **48**, 1184-1199.
- 鈴木平・春木豊 1994 怒りと循環器系疾患の関連性の検討 健康心理学研究, **7**, 1-13.
- 詫摩武俊・戸田弘二 1988 愛着理論からみた青年の対人態度—成人版愛着スタイル尺度作成の試み 東京都立大学人文学報, **196**, 1-16.

付 記

本論文は、富山大学教育学部に杉本が提出した特別研究論文(2006年度)をもとに、尾崎が再分析及び改稿を行ったものである。

(2007年5月17日受付)

(2007年7月4日受理)

